

重要性増すバルブメンテナンス

水道施設には平常時よりも、管の破裂事故や地震災害などの緊急時においても給水機能の確保が強く求められる。水道用バルブは安定給水の要となる重要な機器であり、いざという時に確実に作動するよう、日ごろから点検や修繕作業を適切かつ計画的に行うことが何よりも大切である。こうした分野の官民連携の取り組みが広く浸透する中、クボタ建設は高い技術力を背景に、自社グループ製と他社製を問わず、メンテナンス業務を一括し受注できる強みを持つ。寺谷浩・同社取締役執行役員に、バルブメンテナンスの重要性や事業概要、特長などについて話を聞いた。

■多様な課題対応ワンストップで

クボタ建設は1955年の創業以来、国内外の水インフラの建設に携わり、技術力やノウハウを蓄積しながら水事業の建設会社「水コン」として取り組んでいる。一方、昨年1月に吸収合併した旧クボタパイプテックのノウハウを引き継ぎ、水道用バルブのメンテナンス事業を積極的に展開し



クボタ建設

取締役執行役員・業務統合推進担当

寺谷 浩氏に聞く

ている。

寺谷取締役は、旧クボタパイプテックが同事業に取り組んだ経緯について「元々は管材メーカーであるクボタ

のグループ会社として、洗管、土壌および管体の腐食調査などの維持管理事業を行っていた。旧クボタバルブ事業部の工部門が従来対応してきた官需バルブ製

品のメンテナンス事業を2012年に引き継ぎ、さらには、グループ会社の再編を経て現在に至ります」と紹介する。さらに「水コンとしての設計や施工業

◆(過去に保守点検業務を委託した)大阪市水道局工務部配水課担当係長(管理) 鐘井豊氏、同(維持管理計画) 足立正和氏のコメント:本市では、給水安定性の確保に加え、長寿命化の観点からバルブの定期点検に取り組んできました。

務から、管路調査や維持管理まで、水道事業体が抱える多様な課題に対応し、ワンストップで対応できる総合管路ソリューションを提供する上で、重点的に取り組む事業と位置付けています」と狙

他社製バルブも修繕対応 総合管路ソリューション企業へ

いを説明する。

■メンテナンスと課題

2019年10月に施行された改正水道法では、バルブを含む水道施設の定期点検および維持・修繕が義務づけられ、併せて厚生労働省がリリースした「水道施設の点検を含む維持・修繕の実施に関するガイドライン」に

は、バルブの点検方法や点検周期などが記載されていることから、その重要性は明らかだ。

特に600以上の幹線弁栓類(約5000基)を対象に、当局職員により機能確認を主とする保守点検業務を実施してきましたが、民間企業の高い技術力やノウハウを活かすため、2012年度に当該業務を委託しました。旧クボタパイプ

一方で、設置および使用環境に応じた適切な維持管理の課題について「管路の一部として機能する制水弁などの管路バルブは、設置後に操作されることなく放置される

などの操作機構が経年劣化し、錆や腐食などで固着または破損することで作動不能となります。また、設置数も多く、事業体のマンパワーだけでは手が回らないといった点も課題です。

浄水場や配水池、ポンプ場内のバタフライ弁などの施設バルブについては「電動式や空気作動式が多く、開閉頻度が比較的高いものや、シビアな流量制御などに使用されて

いるバルブもありま

テックについては、2018~19年度に当該業務を委託しており、本市配水設備の維持管理向上に貢献していただきました。本市では、民間の事業者様の技術力に高い関心を持っており、官民連携の推進は当局の運営方針の主要施策と位置づけ

す。バルブそのものが重要な設備であり、定期的なメンテナンスは欠かせません。ただ、供用中の施設では簡単に点検しづらいですし、年々増加する経年バルブへの対応も必要です」と指摘する。

旧クボタパイプテックから転籍した社員を中心に、協力会社とも連携しながらこうした課題の解決に向け日々取り組んでいる。「管路バルブは外観点検や機能診断、分解整備などの点検整備業務、グラウンド部の漏水修繕や操作不能バルブの機能復帰といった修繕業務に対応していま

す。施設バルブはこれらに加え、電動操作機や操作盤の点検整備、バルブ本体の工場持ち帰り整備などにも対応していま

す。いずれもバルブの状態と、求められる機能の差に応じた対応を心がけ、点検の頻度や修繕内容も含めて提案します」クボタの技術、知見をグループ会社間で共有活用する形でのきめ細かな対応力が強みだ。「JWWA規格では規定されていないメーカー独自の部品や、開閉トルクの規定値などを考慮すべき事項が多く、他社製のバルブを取り扱うことに躊躇する企業が多いのが現状です。一方、当社はクボタ以外の製品にも対応できる

ています。今回、旧クボタパイプテックの事業を継承されたクボタ建設が、技術レベルのさらなる発展を遂げられるとともに、今後の本市水道事業の発展にも貢献していただけるものと期待しています。

「近年では、更新ではなく修繕で延命したいという要望も多く頂いていま

ます。経年劣化を早期に発見できることが前提であり、定期点検の重要性を改めて実感頂けるのは」とし「こうしたニーズにも対応し、メーカーの枠を超えたメンテナンス会社の視点で新たな修繕工法を開発するなど、

より付加価値の高いサービスの提供ができるよう取り組んでいく」と今後の方向性を示した。

「バルブの長寿命化にも